

ようぼくの心と心をつなぐ News Letter

信仰のかたち 出来ることを 「コツコツと」

「命をたすけていただいたということは、まだ私にさせていただけることが残っているのだろう」。11時間におよぶ大手術を無事に乗り越えた高山丈夫さんは、病室のベッドの上ですつとこのことを考えていた。生まれつき心室中隔欠損症を抱える丈夫さんが、膀胱がんの宣告を受けたのは8年前。がんの転移や手術のリスクなど、大きな問題が予想されたが、親神様・教祖のご守護で手術は無事に成功。退院から一カ月後には、詰所での「こどもおちばがえり」の準備ひのきしんに参加できるまでに回復した。

この大きな節を通して、心に定めたのが布教所の開設。そして、日々頂く親神様・教祖のご守護を再確認し、「出来ることを少しずつでもさせていただけよう」と、今まで以上にひのきしんやにをいかけ活動へ、夫婦そろって積極的に参加するようになった。

「皆さんの笑顔を思い浮かべながら、アイデアを考えているのが楽しくて」と話す丈夫さん。詰所での「こどもおちばがえり」の会場設営では、得意の装飾関係者を妻の由美さんと担当。また、住まいが千葉県ということもあり、大教会「子弟練成会」の現地での受け入れ



亀葉布教所(福岡分)
高山 丈夫さん・由美さん

れひのきしんにも携わる。そんな高山さん夫妻の所属教会は、福岡県北九州市の福岡分教会。春や秋の大祭月などには教会へ足を運ぶものの、距離の上からも再三というわけにはいかない。だからといって「仕方ない」という思いを持つことはなく、「教会に帰らせていただいたときには、少しでもお役に立てるような一人になりたい」と常に考えている。

そこで、「地域の活動」として展開されている、教区・支部の行事を活用。「所属教会から遠くに住む私たちには、ありがたい学びの場」という、支部の鳴物講習会や祭儀式のお手直しなどの勉強会、また、自宅からほど近い布教の家「千葉寮」の寮祭へ参加している。

教祖百三十年祭の年祭活動二年目の今年、所属の教会が創立百周年を迎える。「先人の方々のたすけ一条の志を絶やすことなく、力強い次の芽吹きをお与えいただけるよう、心を合わせてこつこつと歩ませていただきたい」。

教務報

立教 177 年 2 月

- 2 日 おちば伏せ込み団参(午前中)
- 9 日 岡心勇隊(あやの台)
- 8~9 日 第14回生活復興ひのきしん隊
- 13 日 婦人会委員会
- 岡山勇隊八幡地区
- 9 日 鼓笛隊練習日
- 14~16 日 少年会ウィンターキャンプ
- 15 日 大教会伏せ込みひのきしん(道弘)
- 21 日 大教会伏せ込みひのきしん(相嘉)
- 22 日 事務局会議
- 祭典準備ひのきしん
- 22~23 日 婦人会伏せ込みひのきしん
- 23 日 大教会月次祭 直属教会連絡会議
- 23~26 日 婦人会詰所ひのきしん
- 24 日 教会長教理研鑽 KOG全体会議
- ようぼく育成部会 婦人会連絡会
- 教会活性支援部会 少年会委員会
- 青年会委員会
- 25 日 大教会伏せ込みひのきしん(東松浦)
- おちば伏せ込み団参(早朝)
- 詰所運営委員会 学生担当委員会
- 「教祖を身近に」勉強会
- 28 日 本部月次祭 祭典後お礼つとめ
- 26 日 岡隊・飛鳥川隊おとまり会

◇教養掛(2月)
薬院 清水 ゆう子

◇別席願
(12月16日~1月15日詰所受付分)

- 表田 八竹 正夫
- 表田 八竹 敬子
- 大和二見 本城 靖幸
- 東志免 吉丸 雅矢
- 東志免 西村 利理香
- 西北 森川 千鶴

◇おさづけの理拝戴願
(12月16日~1月15日詰所受付分)

- 東明実 諏訪 部智
- 東明実 山本 圭
- 南阿太 高森 美幸

◇教人登録(12月25日付)

- 大和二見 松本 直美
- 福門 石丸 謙二



家族みんなそろって おちば伏せ込み団参へ

次回は2月2日(日)・3月2日(日)
10時 集合/ひのきしん実動
12時 定時のおつとめ参拝



皆さんの参加をお待ちしています

訃報



須光分教会
小正布教所長
西岡 チヅコ氏(98歳)
1月9日お出直し

葬儀は、光武松市・須光分教会長齋主のもと、1月10日みたまうつし、11日告別式が、須光分教会で執り行われた。長年、布教所長として道の御用に歩まれた氏の御功績を称え、感謝と敬意を込めて弔意を表します。

おぢばを目指した信仰心



大教会では、おぢばへの伏せ込みを、さまざまな形で実施している。一つは、年頭の「おぢば伏せ込みひのきしん」。そして、毎月第一日曜日の午前中と、25日の早朝に行われる「おぢば伏せ込

信仰は、しつかりおぢばに向かうことが大切だと、あらためて感じている。明治8年に、教祖はぢばを定めてくださった。不思議に思うのは、私たちが拝んでいる対象は、仏像でもなく、何か飾ったものでもない。地点である。地点というのは、絶対に変わらない。そこに月日の心を宿しこまれるというか、留まっておられる。教祖の心が、ぢば一点に。

ここからたすけを発信する、世界たすけの波を起こしていくと、明治8年にぢばを定められてから、教祖はいよいよ困難な高山布教を始められる。この時、教祖は「もう一度こ

わい所へ行く。案じな」『天理教教祖伝』第6章「ぢば定め」とおっしゃった。教祖にとつては何も怖いことはないが、私たち人間が見ていて怖く見えるような所へ布教に行く。人々にとつては、大きな不安があったに違いない。しかし、このぢばを定めてくださったことが、どんなことに対してもゆるぎない信仰の足場、土台となっただろうと思う。ぢばを定めてから、いよいよ「大仕事」に

かかっけいかれる。それを感じる。私たちがこのぢばをどのように受け止めなければならないのだろうか。

現在、おぢばへの日参を始めて約2年になる。かんろだいの前で心を込めておつとめをさせていただき、教祖、そして初代真柱様をはじめ、祖霊様に心からお礼を申し上げる。この日参を続けていると、おぢばが恋しくなり、おぢばを求めて足を運びたくなる。行っていないかった時を振り返ると、ずいぶん違うと思う。

同じように、何においても求めなければ物事は起こってこない。求めるからこそ、そこに与えられる。教祖がある時、お屋敷に帰ってこられる方々と力比べをされる『逸話』が残っている。ご存じの通り、神様のご守護や働きというお力を身を感じさせて、国々所々へ送り出された姿だろうと思う。こちらが力を入れたら、そのぶん神様のお力を頂戴できることを見せられている。

み団参」。ぢばに向かつて、また、おぢばの動きに合わせて務めさせていただくことは、私たち信仰者の基本である。このことを心に置いて、「おぢばに来た時は、何か伏せ込ませていただく」というお互いになりたい。

以前ある方が、教会で一生懸命に伏せ込んでもおられる姿を目にした。教会での参拝後に、必ずトイレ掃除をして帰られるのだ。教会へ足を運んだときに、参拝するだけで帰るのはもったいない。教会は、神様に近く、深くなれるところなので、まずはおつとめをさせていただく。そして、柱の一本を拭かせてもらうだけでもいい、「何かさせていただく」という気持ちが大切だと思う。

私たちがようばく・信者お互いは、教会を通しておぢばへと心向けさせていただき、歩みを進めれば、皆で喜べる姿になってくる。しつかりとおぢばに心に向けて、歩ませていただきたい。

12月神殿講話 要旨

「心は種、教理は修理、たんのうは肥」

大教会役員 安井一夫



ただいまは、納めのおつとめを、勇み心でつとめさせていただいた。祭文を通して、大教会長様から親神様にこの二年のご報告をしていただいたが、当大教会の諸活動を通しての、私たちの一年目の「年祭活動」を無事につとめさせていただいたことは、本当にありがたく思う。

振り返ると、多くの学びと喜びを頂戴した。しかし、反省もまた多かった。それでも、来年へ向けて心を改め、しつかりつとめなければならぬが、来年はさらに、今年の「教えを学ぶ」という歩みを、さらに進めたい。

敷島大教会創立百二十年の記念品の日めくり、敷島大教会二代会長・山田伊八郎先生の言葉が書かれている。その一つに、「心は種、教理は修理、たんのうは肥」という一文がある。

この身上は神様からお借りして使わせていただいている。頭では理解しているが、本当に「かしもの・かりもの」への感謝の気持ちで、日々を通じているだろうか。まだまだ人間思案の強い私は、この「かしもの・かりもの」のありがたさを、心の底から感じていないのではと反省することがある。

この体が神様からの借り物であることを悟るには、唯一「我がの理」と許された心の持ち方が重要である。しかし、日々を過ごす中で、心が傷つき、気

持ちがはずみ、殻に閉じこもってしまうことがある。それでは、「種」と例えられる心から根を出すにも出せず、芽も生えない。だから私たちは、「修理」と例えていただく教理を通して、心を養う。

心の種をより良い種にするために、教祖の御教えをしつかり学ばせていただく。これが「教理は修理」。論達第三号に「ようばくは、教えを学ぶ身につけ、日々実践して、土地所の成程の人となる」とお示しいただくように、教祖からお教えいただく教理をしつかり学ぶことが大切である。そのためにも、大教会の諸行事を通して、教祖のひながたを勉強させていただきたい。

そして、「たんのうは肥」。これがなかなか難しい。本当は喜べるはずの出来事も、素直に喜べないことがある。すぐに腹を立てたり、思い通りにならないことで人を責めたりと、私たち人間はこういった心遣いであることが少なくない。

しかし、この心は「我がの理」であり、誰かに頼むわけにはいかない。自ら慎みの心を持ち、嫌なことでも喜びに変える努力をする。身上・事情を通して気付かせていただける「たんのう」とは、どういふものなのかと考える。それは、瞬間的なものもあれば、一年、二年と続くこともある。そのなかで、喜びを見つける日々の暮らしを求めないと、種である心は良くならない。しかし、それは決して簡単なことではない。

そこで、私たちはこのお道を信仰させていただく。信仰を通して自らを省み、より良い種をまかせていただく。そうすることで、その種から根が生え芽吹き、花が咲いて実りを頂ける。これが「心は種、教理は修理、たんのうは肥」であり、自らの歩みや心持ちを振り返り、この先の歩み方を思案させていただく基になる。

いよいよ立教百七十七年は、「中身」を作る、まさに「心づくり」の年。より一層、にいがけ・おたすけに歩かせていただき、大教会からお打ち出しさせていただいた「団参」を通して、一人でも多く人を、一回でも多くおぢばへお連れしたい。

年祭活動第二年目は、大切な中押し之年。その一年を充実させて、年頭の心定め達成という形の上にもその成果を現したい。

その第二年目の特徴となる活動が、各教会で実施されるおぢば帰り団参である。

岡大教会では、年祭活動に向かうに当たって、「ぢば一筋に成人を求め」 「教えに添って成人を進める」という事を基本の心がけとしている。そこで培われる喜びをたすけ心につないで、布教活動を進めようというものがある。

年頭の「おぢば伏せ込みひのきしん」、月2回の「おぢば伏せ込み団参」など、岡大教会のおぢば伏せ込み活動はこれまでも積極的に進んできた。そこで、今年はこれを更に前進させ、おぢばに帰ってたすかってもらう人を増やそうと、各教会でおぢば帰り団参を実施することとなった。

現在までに76教会から団参予定が提出され、帰参予定人数は829名となっている。

今回のおぢば帰りは、主だったようばくが率先しておぢばへ帰り、その勇みで年祭活動に弾みを付けようというものである。しかし、それだけではなく、未信の方を、一人の人もおぢばへお誘いする機会にしようというものが重要な点である。

そこで、団参実施に当たっては、各教会と

未来のようばくにも声をかけるチャンスに！
おたすけは周囲に心を配ることから・・・

R177年 年祭活動中押し之年に おぢば帰り団参 を各教会で実施

も布教を念頭に置いて取り組むこととなる。また、予定している団参で初席者の御守護が頂けない場合は、更に追加の団参を計画していくような積極性が今、各教会に求められている。

教祖を求め

一直線におぢばへ

鶴城分教会

「新幹線団参」



「おぢばへ帰らないと、教祖から心が遠くなる」と思い、

昨年の秋季大祭への帰参を呼びかけた大野真也会長。新幹線団参と、仕事を終えてから参加の人にはホテル付パックでと、参加は二手に分かれたが、部内含めて51名がおぢばへ帰った。

この感激から「今年は秋季大祭に鶴城全体で80名の心定めで向かう。今回は大教会からの声かけもあり、26日曜日なので別席者のお誘いを念頭に、新幹線団参に一本化して、一直線におぢばへ！」と、大野会長は決意を新たにす。

大切なおつとめに もう躊躇しない

おつとめの椅子式で解決！

教会活性支援部(安井一夫部長)では昨年、申込みのあった9教会(枚方、北松浦、西北、肥城、住之都、筑後川、武生水、伊萬里、岡瀧)に鳴物用の椅子(一教会につき9脚)を提供した。これは、教会活性支援部の活動目的の一つである、教会の機能、設備を高めるための支援として、月次祭のおつとめが勤めやすいようにとの配慮からである。

提供を受けた伊萬里分教会は、「これまで足腰の悪い方は、参拝に来られてもおつとめに出ることに尻込みしておられた。しかし、椅子を使い始めてからは、勤めてくださる方



カラー/ブラウン
サイズ/幅43×奥行39
×高さ35cm

が出てきた。今後『おつとめは足が痛い』『しびれるから』と参拝に来られない方に、椅子を使用しての事を伝え、参拝していただくように努めたい」と、椅子を活用した今後の教会の取り組みについて話す。

また、住之都分教会では、「年配の方が多い当教会では、正座が困難という方々も喜んでおつとめに出てくださっている」とのこと。さらに、肥城分教会では、「これまで、正座で長時間座れない人のためにいくつか椅子を用意していた。しかし、かえって気兼ねや遠慮から、おつとめに出ていただけなかったことがあった。今回、すべてを椅子で統一したこと、抵抗なく喜んでおつとめに出ていただいている。高齢者以外の方も、足の痛みやしびれにわずらわされることなく、おつとめに集中していただけるようになった」と、それぞれに喜びの声が聞かれた。

今年、希望する10教会へ椅子の提供を予

定している。ただし、今回は昨年と違い、椅子提供に当たった規定がある。それは、「今年、『岡ようばく成人講座』を2回以上開催することが決まっている」、または「2回以上の開催を予定している」教会のみ。申し込み、お問い合わせなどの詳細は、教会活性支援部まで。

椅子式に合わせて、鳴物台なども足の高いものに新調した伊萬里分教会



教祖から託されているおたすけが、きつとある――

布教活動の基盤 岡心勇隊！

岡心勇隊とは

布教活動を推進する有志が集う「岡心勇隊」。敷島大教会の元である「心勇講」の名前を戴き、心勇んで教祖の世界たすけの御用に勤めることを念願して結成された。

活動の始まりは、教祖百二十年祭へ向かう「仕上げの年」にさかのぼる。岡の理につながる教会長や布教所長、ようぼくが、「論達第二号」に込められた『人をたすける心』を受け止め、自ら進んで布教活動に歩む具体的な動きを展開しよう」とスタート。また、各教会の「年頭の心定め」達成にも反映させるべく、活発に動き出した。

そもそもをいがけは、教会や布教所、ようぼくが普段から実践することが重要で、「行事的」になつてはならない。しかし、一歩踏み出すには大きなパワーが必要で、なかなか実動できていないのが実情である。

そのため、岡心勇隊を通して布教に出るきっかけを作り、声を掛け合い、一緒ににをいがけに出る。そして、互いに勇気と活力を

与え合い、心を合わせて共に行動を起こす活力づくりを目指す。また、布教活動の輪を広げていけるように、当初より地域毎のグループを分け、それぞれの担当者や布教実施日を決めて、各地区で毎月活動を展開している。

現在の活動は

現在は、五条（奈良）・橋本（和歌山）地区、大阪地区、福岡中央（福岡）、姪浜（福岡）、八幡（北九州）、佐賀の地域で活動を展開。それ以外に、教会が遠方の為グループに属せない教会も、毎月熱心に取り組んでいる。毎月9日に行う五条・橋本地区は、約500軒が点在する興住宅地を拠点に、毎回12人前後の参加者が実動。ポスティングや個別訪問を行っている。活動の中心となる芝田真一・南阿太分教会長は、「毎月コツコツと続けることにより、地域の人との繋がりが出来てコミュニケーションがとれるようになった。『こともおちばがえり』の参加者もお与えただけのようにになった。」と話す。



拍子木の澄んだ音と共に、神名がなにわの町に響きわたる。心勇隊：大阪地区

毎月18日の大阪地区は、拠点になる会場を各教会・布教所が順番で決めていく。そのうえで、拠点となる会場の会長らの思いに添ったにをいがけ活動を実施している。

又、29日に行っている福岡中央地区でも、大阪地区同様に会場を順番で決め、戸別訪問を中心の実動。「戸別訪問は、必ず教会の違う者同士が2人ペアになって回っている。2人で回ることによって、お互いにサポートをしたり、勇せ合うことができるから」と森川誠子・西北分教会長夫人は話す。実動後は、お互いの感想や問題点などを話し合い、ふりかえりを常に行っている。

たすけの句 さあ！ にをいがけ



教会活性支援部の安井一夫部長は、「たすけの句、成人の句である今、私たちようぼくは親の声に応え、お互いににをいがけ、更にはおたすけへと力強い歩みを進めさせていただかねばならない。そのうえにおいても、岡心勇隊の継続と共に、一人でも多くの方々に参加いただけるよう、皆様のご理解とご協力をお願いしたい」と呼びかけている。

にをいがけの必需品である、岡オリジナルのチラシ「じぶんみがき」。毎日の暮らしの中で、神様のご守護を感じてもらえ、日々の心の使い方に気づいてもらえるように、誰にでも分かる内容にしています。現在53教会から12,800部の申込みを頂き、2ヶ月に1回配布しています。この「じぶんみがき」を大いに活用し、岡心勇隊を更に活発に活動しましょう。申込みのお問い合わせは、大教会まで。

これからの展開として

岡心勇隊の活動は、各教会、布教所に布教活動の基盤を作ることに。現在、心勇隊の活動が一時停止している明日香・御所地区（奈良）を取りまとめる出口浩和・飛鳥川分教会長は、年祭活動の大切な御用として、早急に心勇隊の活動の定着を目標に、日程の調整を推し進めている。

今年は、教祖百三十年祭活動二年目。大教会では年祭活動の柱として、三つのテーマを基に「岡ようぼく成人講座」を開催し、ようぼくの成人への歩みを進めている。また、3月から6月にかけて各地で開催される「ようぼくの集い」への参加を呼び掛けている。

岡大教会 オリジナル チラシ！

『じぶんみがき』は 50部から配布しています

ちようみりよう
「おいしいね」は調味料

人生80年として 日本人1人が食べる
お米の量は・・・ご飯11万杯
肉類の量は・・・牛 6頭分
にもなり
合計50トンもの食べ物
体を通っていくことになり
ます

そして これらは すべて命あるモノ
私たちの体のはたらきと
あなたかきの元になっています

それをいただくあなたの食卓
けっこう冷えていませんか？
もしも そう感じたら
心から「おいしいね」って
3回言ってみてください

恵みを喜び 相手をねぎらう言葉は
いただく人が最後に加える
楽しみの調味料です！

何でもおいてください！

じぶんみがき

まずは、ポスティングから始めました 43歳 女性

伝えたいことが分かりやすい内容です 68歳 女性

自分自身も磨かれます 47歳 男性

合計 一石一斗五升

恒例の正月お餅つき



餅を仕上げる。その量、もち米に換算して合計1石1斗5升。1合がお茶碗に軽く2杯とすると、

2千3百杯にもなる。釜に火が入れられたのは、午前8時。もち米が蒸しあがるまでに白を温め、鏡餅をこねる台の準備が整えられる。午前9時頃、蒸籠からは真っ白な湯気が立ち上り、いよいよお餅がつき始められた。

人の手でつきあげられるこの「お餅つき」は、かなりの体力が必要な「一日仕事」。しかも、ご本部へお供えされる鏡餅は一つが約6升と大きく、若く勢いのある青年会でも「気合が必要」と笑う。それでも、「ご本部へお供えする大切な鏡餅。一生懸命させていたただこう」と、一白3升のお餅を、3人一組で丁寧についでいく。



餅は、二白分を一つに合わせて、6升のお餅に。その後、お餅は広げては丸め、丸めては広げてを繰り返して粗熱を取り、中の空気を抜きながら仕上げられていく。これは、鏡餅が割れないようにするための重要な作業で、長年の経験と技が求められる。

この仕上げを担当するのは、吉田護国さん（東松浦）、谷川清彦さん（岡道）、蓮池弘之さん（表野）など。今は亡き榊田益男・高田分教会前会長から教わった「業」を生かし、見た目にも美しい鏡餅に仕上げた。

この日は一方で、盛華会による食堂大掃除も行われ、会館ホール周辺の正月準備が同時に進められた。ひのきしんに当たったのは、若い婦人会員（盛華会）を中心とするメンバー。普段手が届きにくい食堂の戸棚や窓など、すみずみまで丹念に拭きあげた。

ペッタン、ペッタン、ペッタン――。

年の瀬も迫る12月27日。大教会の厨房から、お餅をつくりズミカルな音と、元気で勇ましい掛け声が聞こえてくる。この日は、ご本部の元旦祭にお供えさせていただく鏡餅をつく、「ご本部お供えお餅つき」の日。青年会と少年会が中心につき手となり、ご本部へのお供えと、大教会の元旦祭、詰所の分の鏡

今年も開催します

信仰心育む「おつとめ日」

年祭活動二年目の今年、一層活発な会活動を目指す婦人会岡支部（吉田陽子支部長）。昨年の諸活動を振り返っても、委員を中心に各委員長が一手一つに活動を展開。とりわけ、「おつとめ日」は、全20会場（関西6、九州12、関東1、北海道1）で587人の参加があり、「手の揃うおつとめ日」の大切さを確認した。ことはもちろんのこと、「新たな出会いと再会に、人とのつながりが深まった」ことや、「身上と照らし合わせて思案を深めることができ」など、反響も大きい。

また、「回を重ねるごとに、賑やかさを増している。参加者も婦人会の垣根を越え、岡大教会につながるお互いが、おつとめを通してさらなる成人の歩みを目指すことができる行事となった」と手ごたえもある。そんな「おつとめ日」は、今年で開催5年目。婦人会



活動の内容充実を旨とした動きが、今では「おつとめをつとめられる人のお与えを頂き、教会を賑やかにしたい」「どんなお役でもつとめられるようにし、手の欠けることのないおつとめを求めたい」との思いを胸に、婦人会員に限らず、老若男女、男性や少年会員にも広く声をかけている。また、昨年からは「当日に向けての『心の磨き』」に重点を置き、「おつとめ日」に向けたおとふりや鳴物練習の実施を、各会場となる教会を中心に要請。「単なる開催行事にするのではなく、お互いに信仰心を育む『おつとめ日』にしたい」との思いを胸に、今年も取り組んでいく。

今年の開催予定は、全12会場（関西4、九州7、関東1）。現在、会場となる教会の選定を進めており、決まり次第発表する。

R176.12.22-23

婦人会 伏せ込みひのきしん

数日ぶりの晴天に恵まれ、気持ちよくひのきしんさせていただきました。今年一年のお礼と、「来年一年間『みちのだい』としての働きを精いっぱいつとめさせていただきますように」と心を込めて、勇んでつとめさせて頂きました。

担当係：出口 美樹（飛鳥川）

参加者：吉原美代子（今光）
永井千恵美（岡垣）
村田 篤子（福門）



岩永 幸美（香蘭） 小東 美紀（岡垣）
光武 幸代（須光） 森川 誠子（西北）
北川 悟（北佐賀） 順不同

岡分会の心定め、知っていますか？

年祭活動一年目の昨年、5つの「心定め」を青年会長様である真柱様に提出し、活動を展開してきた青年会岡分会。その「心定め」を基に、若年層の会員を対象とした「あらきとつりよう入門塾」や、毎月の「大教会伏せ込みひのきしん」といった活動を実施。そのほか、関東へキャラバン隊を派遣し、「九州巡回」では約30カ所の教会を回った。

また、大きな動きとしては、分会初となる海外布教をスタート。オーストラリアを布教地に、「海外拠点設立」を目指している。

昨年を振り返って、「大教会長様の親心と皆さんの支えを頂いて、さまざまな活動を展開させていただいたが、すべての会員にこの動きが伝わっていない」と上田耕平委員長。昨年の「第89回青年会総会」での、真柱様の「限られた者ばかりがやっている青年会ではなく、(中略)力を合わせて活発な活動を展開していくような青年会であってほしい」とのお言葉を胸に、今年「心定め」の具体的な展開に力を入れる。

改めて、青年会岡分会の「心定め」は

- 一、笑顔で挨拶 百万回
- 一、三万人へにいがけ
- 一、おさづけ取り次ぎ 十万回
- 一、ひのきしん隊 一個班(20人) 達成
- 一、海外拠点設立

の5つ。

中でも、大きな柱の一つとなるのが、今年60周年を迎えるひのきしん隊へ向けた「一個班達成」。12月入隊へ向けて、すでに数名の参加者をお与えいただいているが、まだ少数。「必ず20人でおちばに伏せ込ませていただく」との思いで、一年かけて参加者を募っていく。また、もう一つの柱として計画が進められている「海外拠点設立」は、今年も10月末からの現地布教を予定している。大きな費用が必要なため、参加メンバーや費用捻出などの予定を詰め、海外布教資金のための募金活動や模擬店などを計画。継続的な活動を目指し、

誰にでもできるにをいがけの一助に!!
善久 (Zenkyu) さんの「オカリナ教室」

12月25日、大教会のホールを会場に「オカリナ教室」が行われた。講師は、世界で活躍するプロのオカリナ・ケーナ奏者で、当大教会の「生活復興ひのきしん隊」でも何度かご一緒している善久 (Zenkyu) さん。

今回は、「にをいがけの一助として活用してもらえれば」との思いから開催。明日香村で催される「光の回廊」での演出に向けて、第1回目の「教室」が実施された。

「オカリナ (ocarina)」という名称は、イタリア語で「ガチョウの子供」に由来。「oca」がガチョウで、「rina」が小さなを意味する。

今回の「教室」では、参加者のほとんどが初めてオカリナを触る。そのため、まずはオカリナに慣れるところから初めるために、音出しやロングトーンを実施。実際に音を出すことで、音色を楽しむ。

その後、「低音や高音の出し方」や音の輪郭をはっきりさせるための「タンギング」、心地のいいメロディーにするための「終止音

の出し方」など、細かなテクニックを学習。「アメイジング・グレース」と「浜千鳥」、「さんぽ」の3曲を練習し、全員で合奏した。



3月27日(木)~28日(金)
立教177年「春の学生おちばがえり」
みんな! 27日17:00に岡詰所へ集合だ!

行事予定/27日 受付、オリエンテーション

28日 式典、別席、直属アワー、後夜祭など

※集合・受付は27日の17:00、岡詰所にて行います

参加お供/4,000円(食費、宿泊費など)

対象/高校生(新1年生を含む)、大学生、短大生、大学院生など

問合せ先/岡学生担当委員会(出口浩和/090-3054-1645)まで

立教177年
少年会岡団練成会/総会
3月29日(土)、30日(日)

29日の練成会では、総会でのおつとめに向けての、大切なおてふりや鳴物の練習を行います。そのほか、交流を深めるお楽しみ行事も盛りだくさん。30日は、おつとめまなびと式典、会食、アトラクションなどが催されます。皆様のご参加をお待ちしています。

少しずつ準備を進める。併せて、青年会本部の「海外人材派遣」へ応募する会員をサポートし、共に海外への道を目指す。そのほか、「三万人へにをいがけ」は、全部属分会で活用できるように青年会でチラシを用意し、「おさづけ取り次ぎ」は、集計用の「おさづけ取り次ぎカード」を配布する。「笑顔で挨拶」は、「具体的な回数はカウントしないが、常にその心で通ることを目指す」(上田委員長)。